



**Alex Da Corte**  
**Fresh Hell**  
**アレックス・ダ・コルテ**  
**新鮮な地獄**

2023年4月29日(土・祝)～  
9月18日(月・祝)

展覧会名	Alex Da Corte Fresh Hell アレックス・ダ・コルテ 新鮮な地獄
会期	2023年4月29日(土・祝)～9月18日(月・祝)
休場日	月曜日(ただし7月17日、9月18日は開場)、5月14日、7月18日
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで) ※観覧券販売は閉場の30分前まで
会場	金沢21世紀美術館 展示室7～12、14
作品数	12点
料金	一般 1,200円(1,000円) / 大学生 800円(600円) / 小中高生 400円(300円) / 65歳以上の方 1,000円 ※( )内は団体料金(20名以上)及びウェブチケット料金 ※入場当日に限り、「コレクション展1 それは知っている:形が精神になるとき」(対象期間:4月29日～9月18日)にもご入場いただけます。
日時指定ウェブチケット販売開始日	2023年4月1日(土)10:00～
日時指定ウェブチケット購入方法	当館ウェブサイト( <a href="https://www.kanazawa21.jp">https://www.kanazawa21.jp</a> )よりご購入いただけます。
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
後援	在大阪・神戸米国総領事館、北國新聞社
協力	多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース、川崎市民ミュージアム、 ハイアットセントリック 金沢、株式会社モダニスアンドカンパニー
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL: 076-220-2800

本資料に関する  
お問合せ

金沢21世紀美術館 担当学芸員: 黒澤浩美、野中祐美子  
広報担当: 石川聡子、齊藤千絵、落合博晃  
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1  
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802  
<https://www.kanazawa21.jp> E-mail: [press@kanazawa21.jp](mailto:press@kanazawa21.jp)



## 展覧会概要

現代は、あらゆる場所が視覚に訴える様々なイメージで埋め尽くされています。感情や時間や空間など、本来は見る事が出来ないものまで視覚化しようという中で、クリエイターや発明家は、妄想の世界に分け入っては、より深い物語を伝えるにはどのようにしたらよいか、人間の深層心理に働くイメージとは何かについて、絶えず思考しています。

アレックス・ダ・コルテは、自分にとってなじみ深いと感じるオブジェやアイコンと戯れながら、それらの本来の意味を解体／再構築する作品で知られる作家です。テレビ、映画、コミック、アニメーションなどを中心に大衆文化や消費文化、美術史、デザインなど、様々なソースからインスピレーションを得る点に特徴があり、映像、彫刻、絵画、インスタレーションなど多様なメディアを駆使しながら、アメリカ中産階級の視覚文化をサンプリングしています。どの手法においても鮮やかな色彩と形にこだわりが見られ、見慣れたモチーフも美術史に関する広範な知識と繊細で独特な感性によって、濃厚で優美なアッサンブラージュとなります。人々を誘引する魅力がある一方で、孤独や不安といった、言葉に出来ない人間の情感にも訴え、理性的に整理された領域でなく、奇妙な妄想の世界で人々を踊らせるような魅力をまといます。

アジアの美術館で初めてとなるアレックス・ダ・コルテによる本展覧会では、最近作を含めた全11点の映像インスタレーション作品などを紹介します。圧倒されるような大きな箱型のスクリーンに投影される、様々なサンプリングされたイメージは、実体も無く、コケティッシュでおかしいのですが、深く関わるほど心がかき乱されるような不思議な魅力があります。「新鮮な地獄」とは、視覚情報が押し寄せる中で、現代社会の消費文化を定義するようになった欲望と記憶と知覚の関係にも踏み込み、氾濫するイメージがもたらすものは何か、といった問いにも、私たちを向き合わせています。

黒澤浩美 (チーフ・キュレーター)



112

1,2  
アレックス・ダ・コルテ《ゴム製鉛筆の悪魔》2018  
© Alex Da Corte studio

## 展覧会の特徴

## アジアの美術館で初、アレックス・ダ・コルテの個展

アレックス・ダ・コルテは、1980年ニュージャージー州生まれのアメリカ人アーティストです。彼は人気アニメーションのキャラクターや美術史上の人物に自ら扮し、メディアを通して伝えられる「イメージ」とはいったい何なのかを、私たちに問いかける作品で知られています。2019年にヴェネチア・ビエンナーレに参加し、2021年にはニューヨークのメトロポリタン美術館屋上庭園のコミッションに選出されました。2022年にはデンマークのルイジアナ近代美術館で個展が開催されるなど、近年世界的に評価が高まっています。アジアの美術館で初めての紹介となるダ・コルテの個展です。

---

## メディアを通して伝えられる「イメージ」とは何か、 アメリカの消費文化のポップさと現実の陰鬱さが共存する 大型映像インスタレーション11点を展示

アメリカ特有のポップな色使いとテレビやコミックに登場する見覚えのあるキャラクターのイメージからなるダ・コルテの映像作品は、一見楽しげですが、見ているうちに現実世界における人間の不安や孤独、寂しさを感じさせます。消費文化における人間の欲望や記憶、知覚の関係にも踏み込み、「氾濫するイメージがどこから来て、何をもたらすのか」を私たちに問いかけます。最近作を含む11点のほとんどが、大きなテレビを模した箱に収められたインスタレーションとして展示されます。映像制作は高度なクラフトマンシップによって作られた衣装を含む美術セットの中で、彼自身がほとんどの登場人物を演じている点も見所です。

---

## 美術ファンにはたまらない 美術史と美術史上の人物をモチーフにした映像作品

フィラデルフィア美術館にあるコンスタンティン・ブランクーシ（1876-1957年）の部屋を模した場所が舞台となり、マルセル・デュシャン（1887-1968年）に扮したダ・コルテが登場する映像作品が本展では展示されます。デュシャンが演じたローズ・セラビィ、ブランクーシの彫刻《接吻》のクレイアニメへとダ・コルテが変化しながら演じ分け、人間の存在や時間、恋人との愛と別れを演じるオムニバス映像です。

---

## 「新鮮な地獄」その心とは

動画受信環境の画期的な進化によって、多くの人々が様々な動画と向きあっている現代。同時代でイメージを共有することよりも、多様なコミュニティの中での記憶の形成に移行しているといえるでしょう。その一方でデータ・ネットワークの拡大に反比例して、現実の社会ではコミュニケーションの断絶や孤立した状態も加速化しています。次々と押し寄せる時代の変化に対して、「今度は一体なんだっていうんだ？」(What fresh hell is this?) というリアクションが本展タイトルになっている点も魅力的です。

---

## ダ・コルテの人生の証を展示するマウス・ミュージアムが登場！

当館の特徴ある丸い展示室にダ・コルテのインスタレーション作品《マウス・ミュージアム（ヴァン・ゴッホの耳）》が登場します。マウス・ミュージアムはクレス・オルデンバーグ（1929-2022年）が自身の作品を展示するためにミッキーマウスの形を模し、1972年のドキュメント5で発表された作品です。ダ・コルテはオルデンバーグの態度と精神を受け継ぎ、さらにゴッホへのオマージュを加え、マウスの左耳が切り取られた本作を制作しました。このミュージアムの中には、ダ・コルテが幼い頃から集めていたアニメーションの人形やプラスチックのおもちゃなど、彼の人生の証ともいえる収集品を展示します。

## 作家プロフィール

## アレックス・ダ・コルテ

1980年カムデン/ ニュージャージー州生まれ、フィラデルフィア/ ペンシルベニア州、米国在住。ヴェネズエラ系アメリカ人アーティスト。2018年ピッツバーグのカーネギーインターナショナルを皮切りに、2019年のヴェネチア・ビエンナーレによって世界的に名が知られるようになり、2022年ニューヨークのホイットニー・ビエンナーレにも参加。

主な個展に、ボイマンス・ファン・ベニンゲン美術館（ロッテルダム、オランダ）、セセッション（ウィーン、オーストリア）、MASS MoCA（マサチューセッツ州、米国）、ケルン芸術協会（ケルン、ドイツ）などがある。2021年にニューヨークのメトロポリタン美術館屋上庭園のコミッションに選ばれ、2022年にはルイジアナ近代美術館（フムレベック、デンマーク）において、彼の20年間の作品を網羅したサーベイショウ「Mr. Remember」が開催された。



photo by Hedi Slimane  
© Alex Da Corte studio

## 主な出品作品

ロイ・ジー・ビヴ  
**《ROY G BIV》/ROY G BIV (2022)**

展示室7

映像:60分

虹の7色—Red(赤)、Orange(オレンジ)、Yellow(黄色)、Green(緑)、Blue(青)、Indigo(藍)、Violet(紫)を覚える時に、それぞれの頭文字を順番に並べて一語にしたニーモニック(符号)をタイトルにした作品。フィラデルフィア美術館の有名なコンスタンティン・ブランクーシ(1876-1957年)の部屋を模した場所で、マルセル・デュシャン(1887-1968年)に扮したアレックス・ダ・コルテが、人間の存在、時間、恋人との愛と別れなどをオムニバス形式で演じ分ける映像作品である。会期中に7回、キューブの色を塗り変えるパフォーマンスも行われる。



415

アレックス・ダ・コルテ《ROY G BIV (ロイ・ジー・ビヴ)》2022  
© Alex Da Corte studio

## 《開かれた窓》／The Open Window (2018)

展示室9

映像:11分

スクリーンを跳ね回るプールボールのイメージは、ノベルティ・コンタクトレンズのカタログに由来している。主演を演じるミュージシャン、アニー・クラークのポーズは、ホラー映画に出てくる若い女性が犯人を見たときに感じるであろう恐怖の反応を、タイムラプスで引き伸ばした、ゆっくりとした悲鳴を表す映像作品である。このイメージは、ヤングアダルト向けのホラー小説シリーズである「フィアストリート」の『キャット』という本から援用したものである。ビビッドでポップな色とアイコンとの対比が美しい。



アレックス・ダ・コルテ《開かれた窓》2018  
© Alex Da Corte studio

## 《ゴム製鉛筆の悪魔》／Rubber Pencil Devil (2018)

展示室11

映像:2時間40分

57のチャプターとプロローグで構成された映像作品を、4台の大型リアプロジェクションで四角の箱に映し出すサイトスペシフィックな展示形式で発表する。

20世紀のテレビの時代を中心に、同時代を生きた人々の記憶、あるいはリヴァイバルによって新たに刻まれたアイコンやそれらの文化的背景からインスピレーションを得た全長2時間40分の映像が五つに分割されている。日用品、家庭のシンボル、おなじみのコードで構成された過剰なサイズや飽和状態への没入を促している。パフォーマーの一人はダ・コルテ自身であり、ピンクパンサー、シルベスター・ザ・キャット、ミスター・ロジャース、悪魔といった象徴的なキャラクターにふんして、「らしさ」を演じながら、文脈の正当化への批評に挑戦している。



アレックス・ダ・コルテ《ゴム製鉛筆の悪魔》2018  
© Alex Da Corte studio

展示室14

## 《マウス・ミュージアム(ヴァン・ゴッホの耳)》／ Mouse Museum (Van Gogh Ear) (2022)

マウス・ミュージアムは、クレス・オルデンバーグ(1929-2022年)が、1965年から70年代後半にかけて制作した自身の芸術作品のための美術館で、ウォルト・ディズニーが生み出した世界一有名なアイコン、ミッキーマウスをさりげなく表現した形をした美術館として、1972年のドキュメンタ5(カッセル/ヘッセン州、旧西ドイツ、現在ドイツ連邦共和国)で発表された。ダ・コルテは、オルデンバーグの態度と精神を受け継ぎ、小さい頃から集めていたプラスチックなどの小物をコレクションして、マウスの左耳を切り取ったゴッホへのオマージュのバージョンを制作。まだ若くして人生を記録するには十分な数ではないかもしれないが、彼自身が収集したプラスチックのオブジェの数々はダ・コルテの人生の証となっている。



参考画像：クレス・オルデンバーグ  
《マウス・ミュージアム》外観 1972-77



アレックス・ダ・コルテ  
《マウス・ミュージアム(ヴァン・ゴッホの耳)》2022  
© Alex Da Corte studio

展示室14周辺

## 《THE SUPERMAN》／THE SUPERMAN (2018)

数年前、友人がアレックス・ダ・コルテに送ってきた画像は、パリのルーヴル美術館にあるレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」の前に彼がいるものだったが、実際にはアメリカのラッパー、エミネムを写したものだ。本作品は二人の異なる人物に認められる外見の類似性に基づくイメージを元に、人々が抱く世界的に有名なミュージシャンの人物像を構成するものは何か、どのような大衆心理が働いているのか、プライベートな環境ではどのように振る舞うのか、という問いかけである。



アレックス・ダ・コルテ《THE SUPERMAN》2018  
© Alex Da Corte studio

## 関連プログラム

## キュレーターによるギャラリートัวร์

日程：2023年6月10日（土）、7月8日（土）、9月9日（土）

時間：13:00～13:30

会場：金沢21世紀美術館 展示室

受付：レクチャーホール前

定員：20名

※当日受付、先着順

※事前に展覧会チケットをお求めの上ご参加ください。

※その他のプログラムについては、4月1日以降、当館ウェブサイトにて随時ご案内します。

## 広報用画像

画像1～10を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、当館プレスルームの画像提供ページからお申し込みください。

[https://www.kanazawa21.jp/form/press\\_image/](https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/)

## [使用条件]

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングをご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報課へお送りください。

※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。